

東日本支部だより

2019 年 6 月 20 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

今後の例会予定

第 111 回 定例研究会

2019 年 7 月 6 日(土) 於:武蔵野音楽大学

研究発表※

第 112 回 定例研究会

2019 年 12 月 7 日(土) 於:東京藝術大学

未定

※の詳細は下記↓↓↓(■定例研究会のお知らせ■)を
ご覧下さい。

○研究発表

1. 植民地朝鮮における西洋音楽の受容

—高等音楽教育をめぐる朝鮮人人材育成を中心に—

金 志善(東京藝術大学)

○共同研究報告

2. 植民地台湾における「邦楽」の広がり

—三曲・長唄・検番を事例として—

福田 千絵(お茶の水女子大学)

小塩 さとみ(宮城教育大学)

劉 麟玉(奈良教育大学)

司会 黒川 真理恵(お茶の水女子大学・東邦音楽大学・

武蔵野音楽大学非常勤講師)

■定例研究会のお知らせ■

◆東日本支部 第 111 回定例研究会

時 2019 年 7 月 6 日(土) 午後 2 時~4 時 50 分

所 武蔵野音楽大学江古田キャンパス S 棟 3 階 S312 教室

(西武池袋線江古田駅下車北口より徒歩 4 分、西武有楽

町線新桜台駅下車 4 番出口より徒歩 4 分、東京メトロ有

楽町線/副都心線小竹向原駅下車 2 番出口より徒歩 9 分)

<http://www.musashino-music.ac.jp/guide/access/ekoda/>

■定例研究会の報告■

◆東日本支部 第108回定例研究会

時 2019年3月16日(土) 午後2時～3時30分

所 大東文化大学板橋キャンパス3号館1階3-0105教室

司会 金光 真理子(横浜国立大学)

○卒業論文発表(その1)

1. 現代の邦楽演奏会における音響技術の使用

—その現状と問題—

飛山 哲朗(東京藝術大学)

(発表要旨)

本論文の目的は、邦楽と音響技術の関わりのうち、特に今日行われている演奏会のPAに注目し、そこで実際にされていることやそこに起こりうる問題、それに対する解決策を模索しつつ、さらには歴史的な部分を垣間見ることである。

第1章では、明治以来受容されてきた音響技術が邦楽にどのように関わってきたのかを概観した。PAだけでなく蓄音機なども含めたより広い意味での音響技術について文献調査を行い、邦楽が音響技術と深い関わりを持っていたことを示した。また、邦楽演奏会におけるPAの使用は1929年の宮城道雄による「八十絃発表演奏会」での例があるが、その始まりは明確でないことが確認された。

第2章では、今日の邦楽演奏会でのPA使用状況を、邦楽によく使用される東京藝大奏楽堂などの実例から確認し、邦楽PAによる問題に関する音楽関係者の言及を文献から示した。大規模な会場だけでなく、東京証券会館ホールや国立劇場小劇場など比較的小規模な会場でもPAが使用されることがある。

第3章では、技術者・演奏家5名に行ったインタビュー結果及び、技術者による文献の内容を分析した。邦楽におけるPAは、目立たず、聴衆にその存在が意識されない

ことが望ましいと考えられており、PAを使用する場合、技術者・演奏家双方がそれを目標にしていることがわかった。

そうならない場合は、技術者がその音楽についての知識が乏しかったり、演奏家が音響技術によって可能なこと・不可能なことをわかっていなかったりなど、双方の知識不足が原因の一つである可能性も明らかになった。また、PAに対する積極性は個人差だけでなく音楽ジャンルによる差異が大きいことが示された。

現代の邦楽PAの全貌を把握するには、今後も各ジャンルの演奏家や、より多くの技術者への聞き取りが必要であるが、本論文はその端緒となるものである。

○修士論文発表(その1)

2. 明治から戦前の北海道における鍵盤楽器の役割について —教育現場におけるリードオルガン及びピアノの事例を中心として—

武田 有里(国立音楽大学大学院)

(発表要旨)

本論文では明治24年から北海道で刊行されていた月刊教育雑誌の掲載広告と記事を対象に調査を行い、教育現場におけるリードオルガンとピアノの販売・使用に関する事例を明らかにすることを目的とした。

調査結果として、まず明治20～30年代の月刊教育雑誌の広告には東京や神戸の情報が掲載されており、さらに札幌、函館、小樽など道内各地の書店が、東京の楽器製造社の「北海道売捌所」として楽器の販売を担っていたことが明らかになった。このことから北海道における初期の鍵盤楽器の購入・設置の際には東京を中心とした北海道外から納入されていたことが考えられる。また札幌の書店・楽器販売店である富貴堂の広告では大正10年まで、学校用の楽器としてピアノではなくリードオルガンを宣伝していることが確かめられた。

さらに教育現場への鍵盤楽器の普及に関して、明治 24 (1891)年以降、祝祭日の儀式で唱歌を歌うことが定められた時期に道内各地の学校でリードオルガンが設置され、《君が代》をリードオルガンにより歌わせる・奏することが行われていたことが明らかになった。また師範学校や高等女学校、一部の小学校にてピアノが設置・使用されていたが、一方で大正末期になってもピアノ導入に至っていない学校の事例もあり、今回の調査範囲の期間はピアノの普及には時期尚早であったと考えられる。また鍵盤楽器は教育現場において遊戯・ダンスの伴奏、修礼の合図など、唱歌の伴奏にとどまらない役割を果たしていたことが明らかになった。これらの役割は楽器の特性に関わらずリードオルガンでもピアノでも実践が可能であるため、楽器の選択は学校の設置状況に左右されていたのである。

本論文の調査結果を足掛かりとし、今後も北海道各地の教育現場のみならず様々な使用環境における鍵盤楽器に関する事例を調査し、最終的には北海道における鍵盤楽器の普及に関して総合的な考察を試みることを予定している。

(傍聴記： 齊藤 紀子)

武田氏の発表は、北海道教育会の機関誌に掲載された鍵盤楽器の広告と関連記事の分析をもとに、教育現場におけるその役割を考察するものであった。

フロアからは、①北海道に注目した背景、②調査対象とした教育機関の範囲、③楽器の導入実数のデータなどについて質問があがった。それに対して、①開港地函館があるものの横浜や神戸のように未だ調査されていないこと、②札幌農学校や教員を対象とした講習会も含め雑誌に掲載されたものを分析したこと、③今後の課題の1つであることが示された。

教育現場に必要とされた鍵盤楽器が、書店をはじめとする既存の教科書販売網に沿って普及したことは先行研究で明らかにされている。『音楽界』の「地方の楽況」欄など

全国版の音楽雑誌も調査し、道内のミッション系女学校における独自の教育について調査することにより、日本の洋楽受容における北海道の位置づけとその実態がより明らかになるだろう。博士課程でとり組まれる今後の研究の進展に期待する。

3. 世界音楽の統計的普遍性に着目した中学校音楽における鑑賞教材の分析

平野 悠佳(東京学芸大学大学院)

(発表要旨)

本研究は、児童生徒が生涯にわたり多様なジャンルの音楽に親しみ、学び続けていくための基盤となる資質・能力を育成するために、授業で学んでいない音楽の学習に繋がる音楽の「統計的普遍性 statistical universal」が、授業で扱われている楽曲にどの程度存在するのかを明らかにすることを目指すものである。

統計的普遍性とは、「事実上ほとんど全ての場所に存在するが、いたるところに存在するわけではない特性あるいは特徴」を指す。音楽の統計的普遍性については、Alan Lomax のカントメトリクスや H-S 楽器分類法などに基づき、Patrick E. Savage が 32 の世界音楽の統計的普遍性とその分類法(以下、サベジ音楽分類法)を提唱している。本発表では、サベジ音楽分類法を応用し筆者が行った 2 つの分析の方法と結果を中心に詳述した。

本研究の分析(1)では、音楽科教科書『中学音楽 音楽のおくりもの』シリーズの付属鑑賞 CD に収録されている 210 曲を対象とし、サベジ音楽分類法から抽出した 29 の音楽の統計的普遍性と、新たに加えた弦鳴楽器の項目について各楽曲を評価した。その結果、Savage らが行った『ガーランド世界音楽百科事典』の結果と比較すると、「高音域」や「気鳴楽器」、「5 音音階」の出現率が高いことが分かった。また、「長短の変化のパターンが少ない」や「最大の音

程が完全 5 度より狭い」等の出現率は低かった。本分析で新しく加えた「弦鳴楽器」は、膜鳴楽器や体鳴楽器よりも出現率が高い結果となった。

分析(2)では、サベジ音楽分類法の評価方法及び結果の信頼性を検証するため、5 人の評価者で 17 曲を再分析し、回答一致率と κ 係数を求めた。その結果、Savageらの分析結果と比較して平均回答一致率が 3.9 ポイント低い 68.3%、 κ 係数は 0.119 ポイント高い 0.351 であった。しかし、両者ともに大きな変化がみられなかったことから、さらなる評価基準の改善が必要であることが分かった。

今後の課題として、より広範な教材を分析対象とすることや、音楽分類法の信頼性を高めるための手立てを講じることなどがあげられる。

(傍聴記: 山下 正美)

本発表は A. Lomax の Cantometrics のように統一的な基準を設け、エティックな立場から中学校鑑賞教材の統計的普遍性の分布を明らかにしようとするものであった。分析は、パット・サベジ Savage et al. (2015)が提示した 32 の評価項目に基づき、発表者が若干の修正を加えた 30 項目によって実施され、サベジ(2015)が『ガーランド世界音楽百科事典』の音源をもとに算出した各項目の出現率との比較、および今回の調査における回答一致率の検討という 2 種の分析によって結果が導き出されていた。

筆者自身も、ポストク時代にサベジ Savage (2012)本人から CantoCore のレクチャーを受け、Lomax 音源のコーディングを経験した。こうした評価項目は、多様な聴き方を拓く指標のひとつともなり、これを鑑賞教材の分析に適用しようとする発想はおもしろい。音楽教育学に、民族音楽学の視座や研究成果を活用しようとする意欲的な研究であり、他分野からも学ぼうとする姿勢が今後さらなる展開へとつながるよう期待したい。

◆東日本支部 第 109 回定例研究会

時 2019 年 4 月 7 日(土) 午後 2 時～3 時

所 お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 102 室

司会 金 志善 (東京藝術大学)

○卒業論文発表(その 2)

1. タイ古典音楽における民族的多様性

—サムニアンパサーの基礎研究—

小倉 志穂(東京学芸大学)

(発表要旨)

従来のタイ古典音楽研究は音楽学的研究と人類学的研究が比較的切り離されている。姫野(1963)は修士論文でタイ古典音楽楽器を人類学的考察の対象にし、タイの開放的な社会と楽器の民族的多様性を結びつけて考察しているが、それは楽器という音楽の外的な一部分のみであり、実際の内容である音楽構造には触れていない。

外国人としてタイ古典音楽を研究する難しさとして、実践できなければ研究もできない、という現実がある。タイ古典音楽は理論ではなく実践から成り立つ音楽であるため、その理論を構築するには自らがある程度の実践者であるか、インフォーマントの知識をそのまま拾うしかないのである。更に、技術習得のために師弟関係を一旦結ぶと、どうしても演奏に偏りがちになってしまい、研究とのバランスがとづらい。よって、実践から得た知見を研究材料として活かすことは、該当文化に属さない外国人にとって高い壁であり、外国人による音楽内容に特化した研究が少ない要因でもあると考える。

又、タイ人による研究は、やはり大半が演奏者兼研究者であるため、演奏の技術や即興方法に着目したものが多く、どれも音楽学的研究の域をでない。更に、研究対象であるサムニアンパサーはタイ人の感覚的異文化受容から発生したものであるため、存在自体が前提となっており、その存在意義や体系的研究は長年されてこなかった。

よって、本論文ではサムニアンパサーを構成する要素を音楽的、体系的に分析し、サムニアンパサーが作られた背景を政治的、文化的側面等から考察することを試みた。また、音楽的分析からタイとは何かという大きな疑問にもアプローチすることができた。尚、音楽分析において従来の五線譜を用いた西洋的なメソッドではなく、タイ的メソッドを用い、内側から分析することで、先行研究でありがちな現実と研究の乖離や誤解を極力削減するよう努めた。

○修士論文発表(その2)

2. 小学校音楽科における狂言の学習プログラムの開発

小川 公子(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

本研究は、小学校の音楽科教育において狂言を教材化するために、狂言を用いた先行研究の課題をもとに、狂言の特徴や伝統的な稽古法による学習形態や方法を柱とする学習プログラムを構想・展開し、その実践検証を通して可能性と課題を明らかにすることを、目的とするものである。

狂言は、我が国の重要な伝統芸能である。現在、学校教育では、狂言を教材として、国語科や社会科等で扱われているが、音楽科で扱われることは少ない。しかし、狂言は、音楽、舞踊、演劇等の様々な分野による総合的な芸術である。その観点からすると、狂言の特徴やよさは、音楽科の方が、より捉えやすいのではないかと考えた。

そこで、狂言の特徴や伝統的な稽古法を調査研究し、そこから導き出された音楽科における学習形態や指導法を、総合的な活動からのアプローチ・模倣と創造からのアプローチ・遊びと型からのアプローチの3つの柱として、学習プログラムを構築した。また、本プログラムをもとに、小学校低学年、中学年、高学年で実践検証した。

その結果、総合的な活動のアプローチにより、実感を伴

った感じ取りを得られたこと、遊びと型からのアプローチにより、狂言への興味をもつと同時に基礎的な表現を身に付けることができたこと、更に、模倣と創造からのアプローチでは、主体的な学びから創意工夫へと学びが深まったこと等の成果を得ることができた。このことは、音楽科での狂言の教材化の可能性を示すものである。

課題としては、狂言の授業を普及するための視聴覚教材の開発や、本実践の曲以外の曲による教材開発、記譜の工夫、音楽科における鑑賞と表現の枠を超えた柔軟な枠組(総合的な活動)の学習計画案の開発の3つが挙げられ、今後も、それらの課題解決を目指し、研鑽を重ねていきたい。

(傍聴記: 澤田 篤子)

狂言は、そのセリフ主体の演劇性から、主に小学校国語科の教材として扱われているが、音楽科でも狂言のセリフや舞の特徴を模して表現するなど、表現領域での取り組みが一部でなされている。小川氏は、狂言の総合芸術性、謡と舞の重要性、そして伝統的指導法である型の模倣に注目し、児童が楽しみながら創意工夫できるように総合的な活動を取り入れて、鑑賞・表現の両領域にわたる緻密な学習プログラムを構成・実践された。

本実践では、1時間扱いの授業で、師匠から弟子への口承という伝統的側面を、集団を対象とする学校教育に反映させる難しさがあり、それを補完すべく楽譜を援用した結果、楽譜にはなかった「間」に児童が気付いたという。このような非伝統的側面との対比から伝統的特質を学ぶうことを示した点でも、本研究は貴重である。今後は、小学校でこそ可能な国語科・音楽科との連携、中学校音楽科における能の学習への連動といった教科横断・小中連続の学習への広がりも期待したい。

■会員の声 投稿募集■

○金志善編『京城日報音楽関連記事・広告目録集』

(2019年3月、ISBN978-89-285-1283-6、民俗苑(韓国)、736頁)

本書は、植民地朝鮮(1910年～1945年)において最も影響力を持ち、朝鮮総督府機関誌の役割を果たした『京城日報』(日本語版)の音楽関連記事と広告を抽出し、植民地朝鮮の音楽の実態を全体的に把握できる資料集の作成を目的として刊行いたしました。ご購入を希望する方は、sujie79082003@gmail.com までご連絡ください。販売価格:8,500円。送料:500円。

(投稿者: 金志善)

■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2019年10月20日(11月上旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Faxまたはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

Fax: 03-3832-5152、E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

■定例研究会発表募集(12月例会、2月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、12月例会については9月20日までに、2月例会については11月20日までに、東日本支部事務局までお申し込み下さい(tog.higashi@gmail.com あてメール添付か郵送)。

なお、メールご利用の方で、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

■編集後記■

今号の支部だよりでは、3月と4月の例会に行なわれた卒、修論発表の報告をお届けします。原稿をご執筆いただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は11月上旬を予定しております。(AS)

発行: 一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集: 奥山けい子、尾高暁子

倉脇雅子、齊藤紀子、佐藤文香

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com
